



『フットパスによるまちづくり』から足掛け10年、“未来づくり”と展望を広げた第二弾が刊行されました。日本で<フットパス>という言葉が使われるようになって20年ほどが経ち、今では全国に122の団体があり、575本のコースが設定され、総距離3,519kmに及んで、多くの自治体等から注目されています。近場の緑を再確認する若い層が増え、移住への起動力ともなっています。フットパスは確実に浸透していると思われます。

コロナの時代を経て社会や政治も大きく変わりました。災害、疫病、戦争が次々に出現し、予測不能な社会になってしまったのです。予測不能な社会では、“優しさ”が大切で、それがなければお互いに共存できなくなると思います。フットパスはそんな優しい社会づくりに貢献できるのではないのでしょうか。

編者：神谷 由紀子 泉 留維 監修：日本フットパス協会 第3章～第6章の寄稿：各地の実践者など

【編者等紹介】

(かみや・ゆきこ) 上智大学院卒。1992年居住する町田市北部に残る多摩丘陵を保全するフットパス活動を開始。1999年ごろから『多摩丘陵フットパスマップ 1・2』や『まちだフットパスガイドマップ 1・2』などのフットパスマップの出版にかかわる。2002年“NPO 法人みどりのゆび”の認証(東京都)、理事・事務局長。日本フットパス協会理事。

(いずみ・るい) 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程単位取得満期退学。2004年、専修大学経済学部専任講師を経て、専修大学経済学部教授。専門分野は、エコロジー経済学、コモンズ論など。主著に『コモンズと地方自治』(共著、日本林業調査会)、『環境と公害：経済至上主義から命を育む経済へ』(共著、日本評論社)など。

(日本フットパス協会) フットパスの普及・啓発をめざして2009年に設立。フットパスの整備を通じて、地域の魅力を地域自身が再発見・創造し、その魅力をウォーキングを中心に現地体験・交流することによって感じる地域・観光の在り方を体現している。2022年現在、65団体が加盟。

【内容説明】

まず、フットパスとは何かを示し、フットパスの現状と歴史などを俯瞰します。次いで「広域連携」「経営」「移住者」「共生」という各視点からこれまでの取り組み事例と目指すべきビジョンを紹介。最後に、ポスト・コロナ時代のフットパスは地域にどう役立つのか、そして地方移住を検討している人たちの生活支援ツールとなる可能性を紹介します。

【目次】

第1・2章	フットパスを知る、楽しむ、つくる(神谷)	日本のフットパスの今(泉)
第3章～ 第6章	フットパスと広域連携(事例／長井市ほか) 移住者とフットパス(事例／栄村ほか)	フットパス経営の発展(事例／南魚沼市ほか) 現場から見たフットパスにとって大切なこと
第7章	フットパスの未来貢献(神谷)	

頒価【2,970円税込み+送料】 購入希望の方は下記事務局宛にご連絡くださると、少し割引となります。

【事務局】「みどりのゆび」事務局連絡先

〒195-0053 東京都町田市能ヶ谷町 7-38-10

電話 042-734-5678, FAX 042-734-8954

- E-Mail : info-m@midorinoyubi-footpath.jp
または : yukikokamiya@gmail.com

↑

メールアドレスをクリックするとメールソフトが開きます。